

# 「死ぬ私」を受け入れる

宗教社会学者・大村英昭さん



「心の平安を与える鎮めの文化こそが、宗教の役割だ」と語る大村英昭さん。兵庫県宝塚市

宗教社会学者で、浄土真宗本願寺派僧侶でもある大村英昭さん。大阪大名誉教授(71)が4年前、末期がんと診断された。「死ぬ私、命を見つめたい」。一時行っていた抗がん剤治療をやめた大村さんは対談や講演会で、生きる意味を語り続けている。

「どんなに幸せに生きている人でも、いつかは死ぬ。医療技術が発達した現代といえど、どうにもならない。だれもが『死ぬ私』に違いなく、死と対面すべきなんです」

5月17日、大阪・中之島の市中央公会堂。「苦」をテーマにした仏教講演会で、大村さんが1時間あまり、約4000人の参加者を前に語った。

大腸がんの手術を受けたのは2010年9月。大腸の3分の1を切除した。この際、がんが腹膜に転移していることが判明。「放置すれば余命8カ月」

## 末期がん 抗がん剤治療を中止

## 限られた生の充実 追求

抗がん剤を投与しても余命2年」と告げられた。

「なんとなくホッとしましたね。あと2年あれば人生の後始末ができる。限られた時間のなかで、いかに生を充実させていこうか、と」

抗がん剤治療は3週間のサイクルだった。病院に行き、2種類の抗がん剤を点滴で投与。2時間半かかった。翌日から2週間、朝晩5錠ずつ飲んだ。それが終わると1週間あけて、再び病院で点滴。このサイクルを約3年間続けたが、がんの大きさを示す腫瘍マーカーの値は約8倍に増えた。より強い抗がん剤の投与を勧められたが、「しんどい思いをしてまで続ける意味はない」と半年前にやめた。

生の期間が限定されたことで、仏教でいう「諦観」を改めて意識するようになった。あきらめを意味するが、物事の本質

おおむら・えいしょう 1942年、大阪市生まれ。大阪大教授、関西学院大教授などを歴任し、現在は相愛大教授、大阪大名誉教授。浄土真宗本願寺派の僧侶で、兵庫県宝塚市の円龍寺の住職を務めた。84～85年に起きたグリコ・森永事件を「劇場犯罪」と呼び、注目を集めた。著書に「現代社会と宗教」「臨床仏教学のすすめ」など多数。

を明らかにすると説明する場合もある。だが大村さんは言う。

「あきらめる、と素直に解釈すればいいのではないか。限りある生を静かに閉じる。がんばらず、あきらめることも自然だ」

宗教社会学者として、戦後の日本を「禁欲的ガンバリズム」と説いてきた。経済発展こそが豊かさであり、富や名声を得ることに幸せを求めた時代。未来の栄光をつかむために今は我慢だ、がんばれ。学校も会社も競争を求め、新宗教をはじめ多くの宗教が現世利益を唱えた。

だが、バブルは崩壊し、阪神大震災にオウム真理教事件が続ぎ、東日本大震災に見舞われた。「社会の不安を抑え、心に平安を与えてこそ宗教。あおりの文化ではなく、鎮めの文化を広めるべきだ」

05年のJR宝塚線(福知山線)脱線事故で大学生の娘を失った両親に会った。阪神大震災でも東日本大震災でもそうだが、不条理な死に直面した人たちに、どんな言葉をかけていいのか。遺骨や遺体から離れられない魂はどこへいくのか。

僧侶として、今、多くの人たちに伝えたいことがある。

「誰にも、かけがえのない人がいる。父や母かもしれない、恋人や仲間かもしれない。だが、かけがえのない人を失ったことのない人はいない。生ある限り、かけがえのない人の魂がどこへいくのか、たずね続けてほしい。そう思う心が、きつと安寧に結びつく」(岡田匠)